Title	潮田先生への追悼
Sub Title	
Author	多田, 真鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.8 (1969. 8) ,p.165- 169
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	潮田江次先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19690815-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

潮田先生への追悼

多田真鋤

潮田先生が去る五月九日の夜、慶應病院の一室で御逝去になられてから早くも一ヶ月余の日数が過ぎた。この時期において先生についての回想を記するには尙早の感がなきにしも非ずで

あるが、哀悼の意を表する意味で少しく先生について語つてみたい。

先生の生前の御経歴やそのお人柄については、多くの先達の方々が追悼の辞を述べられることと思う故、私は先生の学問的特色の一端を私なりに述べてみたいと考える。

先生が御他界になられて以後、お通夜とか御葬儀等の日程がひき続き、その間先生から薫陶をうけられた数多くの方々々と接する機会をもつことができた。その方々が異口同音に語られたことは、先生の「政治哲学」の御講義はまさに異色のものであり、余人の追隨を許さぬ独自のものであつたといふことであつた。先生の思い出をこれらの方々々と語り合いながら二十年以前の学生時代の日々を私は懐しく思い起していた。

先生の講筵に列した人々が一概に認めたように、先生の御講義はまことに特徴のあるものであつた。物静かに政治の概念、政治の本質、政治の価値、政治学の学問的性格等々を講ぜられる講義のうちには、他の学説批判の峻厳な語調が常に潜んでいた。

先生自ら、御著書「政治の概念」の「はしがき」に次のように述べておられる。

ここに暫く引用させていただこう。

「吾々がプラトーンの説く不変の真理に感歎し、アリストテレ

ースの述べる現代的な所論に驚くのは少しも咎むべきことではないけれども、それと同時に現在の国家論や政治学が如何にプラトーンと変りがなくアリストテレスそのままであるかに驚歎することを吾々は忘れていたのではないか。政治学は独立の科学としての新しい基礎づけが必要なのである。独立分業の時代になつた今日、よろづ屋商売が蚕食された残りの品物を商つてずる／＼と続けて行くのではその寿命はそこばくもない。屋号が例えば『酒屋』で始めたのなら、ここで商売を本当に酒屋と限つて、炭だの薪だのたわしだの余計な物からは総て手を引いて、新装一番、本業に邁進することが唯一の更生の途である。本書ではその屋号看板をはつきり上げることにはいささか努力したつもりである。看板をさらつて行こうとする者に対しては、これをあくまで撃ちしりぞけた。他家から養子を迎えて新規な商売を始めようという提案には、どこまでも不賛意を表して家名を護つた。屋号を殊更に窮屈に考える者にむかつては、その偏狹を戒めて新生の前途をひろく望ませた。」といわれ、さらに「本書で批判した学説には、わが学界に行われるものもあれば、外国の学者の説もあるが、そのいづれに對しても一貫して著者がとつた態度は、如何なる海外学説の祖述でもなく、一個独立な日本の学者として自ら考え自ら得た結論を述べる事、しかしてその故に、またその上に、如何なる外国の学界に

持出しでも通用し評価され得る論議見解を提示する事、この二つであつた。著者は鎖国主義の学問論には一片の同情も持合せない者であり、知識を普く内外にもとめ、教をひろく古今に仰ぐことを以て学を説く者に欠くべからざる要件と認めるものであるけれども、今なほ西洋学者の後権がなければ何事も言い切らぬような心掛けの、日本人としての自負、学者としての自信に欠けた態度の者がとかくわが学界に口数の多いことを残念に思う者である。」と述べておられる。

「政治とは何か」、「その本質は何か」という課題への徹底したアプローチが、先生の学問研究の上に示された姿勢の特色であつたといつてよからう。この学問研究の姿勢が、先生に終始一貫したものであつたが故に、いわゆる「政治概念論争」も起り得たのであり、わが国近代の政治学研究の歴史の上に大きな足跡を残したものであつたといつても過言ではない。

先生の学者としての姿勢は、常に論争を通じて示されたものであつた。戦前における戸沢鉄彦教授との政治概念に関する論争、戦後においては、リンコンの「Government of the people」の意味について、蟻山政道教授との間に行われた民主政治論争等、まさに「論争」を通じての政治概念の追求が先生の学問的性格であつたといえよう。私はこの政治学研究におけるポリミュークな性格が形成されてきた背景を次のように理解してい

る。先生がヨーロッパに留学された大正末期から昭和の初期の時代は、イギリスにおいてもドイツにおいても社会科学界ではしきりに論争が行われていた。

ラスキとコール、ケルゼンとテンニース、シュミットとトーマというように、政治学上の種々の課題をめぐつて著名な学者間にたえず論争が展開され、論争を通じての問題の本質への考究が相互に行われていた。

往時のヨーロッパのこのような学界の雰囲気、先生の政治学研究の上に与えた影響をわれわれは看過してはならないものと思う。

先生の論説は頗る峻厳な語調を以て述べられ、ミリタントな傾向にみちみちている。

政治哲学の講義を聴講した人々が、ひとしく感じたことは、他学説に対する仮借ない批判が中心になつて展開されたことであつた。その際、他の学説批判の基調にあるものは、「政治の本質とは何か」という問題意識なのであつた。

先生の学問研究におけるこのような峻厳な態度はいろいろな面においてあらわれている。西洋人名の読み方一つをとつても、先生は実に厳正確実な態度を要求されていた。昭和十一年の「三田政治学会誌」の第十一号と第十二号に「洋名よみ方よしあし記」と、「ことはのこだはり」という二つの文章を書い

ておられるが、先生の面目躍如としている個所をあげてみよう。「Mactave」は、カイブーでは無論なく(中島重マックアイブアー、今中次磨マックカイバア)、マクイブーと固苦しく分けて読むにも及ばず(高田保馬マクイバア、蟻山政道マックイブア、高橋清吾マックイブアー)、楽にマクイブーと言へばよい。」といわれ、他の個所では「Fonies は日本でテンニイス(岩波人名辞典、高田保馬、松本潤一郎)トエニイス(新明正道)テンニイス(波多野鼎)トエンニイス(蟻山政道)トエニイス(尾高邦雄)等さまざまに書かれるが、前半のテ、トエ、テン、トエン、テ、トエーは説方の種類ではなく、如何に書き表わすかの違い故ここに論ぜず、後半のニイスかニスか(『イ』と『一』、『エ』と『イエ』はこれまた書き表し方の違い)については後者が正しい。彼自身の口から聞くことは出来なかつたが、やはり独逸社会学界の元老たるフランツ・オツペンハイマーが明かに「トエニエス」と呼んでいた。」といつておられる。

最後に先生の思想の一端が覗える「慶應義塾論」に触れておきたい。慶應義塾で刊行している塾生案内の別冊「大学はかくありたい」の中に、先生は慶應義塾の教育理念を次のように述べられている。「日本国民は、福沢によると、『古来極端、浅薄、狭量』であるが(明治二十一年『尊王論』)、『人の心の軽躁にして極端より極端に移るは無学無識の致す所』だという。現代でも

戦前、戦後の日本人の言動、社会人心の移り変わりを見る時は、思い当たる所が多々ある。『文明の進歩は寛量包容』にあると福沢は述べ(明治十二年『民情一新』)、『経世の要は中庸を保つにあり』と説いた(『尊王論』)。われわれの周囲から一人でもこのような無学無識の極端論者を無くし、それに代わつて独立の見識と品位を具え、実生活に即して事の得失成敗を理づめに考量し、合理的に行動する人間に日本人を教育し、先導して行こうというのが、福沢の念願であり、今日も慶應義塾の教育目的でなければならぬ。」といわれ、さらに「日本人の心から被治者根性、卑屈な習性、劣等意識を一掃して、権力を有難がらず、従つてこれに依頼もせず、独立の見識と自尊の品位を具え、物事を実証的・合理的に考えて、自分達の手で、有効な改革を着実に進めて行く甲斐々々しい活発な国民をつくらうということが、今日も塾の教育の目標でなければならない。」といわれている。この文によつて先生の慶應義塾における教育理念を知るとともに、また大学の理念をも覗い知ることができると思う。

かつまた、この文章に顕現しているところのものは、先生が学問研究に対して示された姿勢と対社会的態度の両方に通ずる一貫した先生の思想であつたともいえよう。

われわれは学生時代に先生の講義を聴講し、卒業後もひきつ

づいて先生の薫陶を受けてきた。日本政治学会が地方の大学で開かれたときは、先生のお供でしばしば各地の大学に出かけた。先生が寡黙な方であつたことは、多くの人々が等しく認められるところであらう。しかし、旅先の旅館の夜などでは、ウイスキーを片手に先生はよく語られていた。先生はどちらかといえは宵張りな方であつた。

夜半の一時、二時まででもわれわれ後輩を相手に往時のヨーロッパの学界のことなど懐し気に語つておられた。

しかし、先生を中心としたあの楽しい語らいの夜はもう再び実現できなくなつた。

先生の御冥福を心から祈つてこの拙い追悼の文を閉じたいと思う。

潮田先生の人と学問

根 岸 毅

大学で研究生活を始めたものにとつて、研究上の指導教授

が、学問的に尊敬でき人間的に好きになれるということは、非常に幸せなことに思えます。潮田江次先生は、私にとつてそういう方でした。

私の先生との出会いは、非常に奇妙なものでした。それは、私が日吉で必修の「政治学」をとり、最初の授業に出た時のことです。教室に入つて来られた「S」先生は、その時間中、政治学の話しをされながらS先生のことをさかんにおほめになるのです。私は、大学の先生とはあんなにも自分で自分のことをほめるものかなと、違う人種でも見るような目つきで、その頑丈な体軀の先生を見つめていました。ところが、次の週に現われたのは、まったく別人の本物のS先生でした。初めの週には、二人とも間違えられて、私たちの教室に来られたのは潮田先生だつたわけです。今になると、こんなことが忘れられない思い出となります。そしてまた、いつかそれをお話した時の先生の笑い顔が思い出されます。一見すると近づきたいような「むずかしい」顔と、あまりしばしばお見せにならないかつた子供のようない「あどけない」顔とが、それでいて少しも矛盾のない先生の人となりであつたように思います。

多くの人には、「むずかしい」顔の先生しか知られていないのではないでしょうか。先生は、大体において多弁な方ではありませんでした。学部四年の時に先生の「政治哲学」の授業をと